

手記募集！「私にとっての地下鉄サリン事件」

「あの時私は・・・」「もしかしたら・・・」「じつは・・・」

12年前のあの日のこと、今日までの想い、いま考えていること…

私たちに教えてください

地下鉄サリン事件被害者の会から“手記募集”のお願い

■テーマ：「私にとっての地下鉄サリン事件」

■趣 旨：最後部記載の「はじめに」の内容をご覧ください。

■文字数：1000文字程度

■概 要：2007年3月20日は、地下鉄サリン事件から12年、遺族にとっては13回忌になります。刑事裁判は時間を要しながらも進んでいるものの、被害者等への公的被害回復は何もない状態です。私たちは、毎年被害者救済を訴え続けていますが、このたび下記のような要領で、広く皆さま方から地下鉄サリン事件についての手記を募集し、「あなたの想い」と「私の想い」を共有したいと考えています。

来年2月中旬ころまでに応募いただいた手記は、2007年3月17日（土）笹川記念会館でおこなわれる「地下鉄サリン事件から12年目の集い」の際、冊子で配布、朗読させていただきます。その後もたくさん寄稿されましたら、単行本化するよう出版社と交渉することも考えています。

なお、予めお断りいたしますが、手記を冊子、朗読、単行本で掲載等させていただく場合、地下鉄サリン事件被害者の会とオウム事件の被害対策弁護団で、選択、採用の可否を検討させていただくことがあります。また、応募作の著作権は、地下鉄サリン事件被害者の会に帰属することとし、出版した場合の収益は、地下鉄サリン事件被害者の会に寄付していただくことをご了解ください。

■宛先メールアドレス：sharp smile5@hotmail.co.jp

■記載事項：①ご住所 ②お名前 ③男性、女性の区別 ④年齢（または年代）

⑤連絡先電話番号 ⑥メールアドレス

■上記①～⑥をお願いする理由

○応募作を、冊子に採用してもよいかどうか、ご連絡したい。

○掲載する手記に、お名前、年齢（または年代）を付したいと考えていますので、そのご了解、または、仮名にするか匿名にするかのお問い合わせをしたい。（その他の個人情報掲載しません）

○掲載する手記に誤記があった場合の訂正や、表現の統一等のために書き換えることがあることのご了解を得たい。

○応募作を採用させていただいた場合、冊子をお送りしたい。

○単行本にする場合にも、以上のようなご連絡、郵送等を同様におこないたい。

個人情報利用目的について：いただいた個人情報につきましては、手記に関するご連絡、2007年3月17日の集会のお知らせ他、オウム事件関係の被害者集会のお知らせに利用することがあります。この目的以外には利用もしくは第三者提供いたしません。

■手記「はじめに」(案文の段階ですが、趣旨をご理解いただくために記載します)：

1995年3月20日、東京の空は快晴で、ポカポカ暖かな日だった。地上にいた人々は、まさかその下でサリンがまかれ、いくつもの駅構内で惨事が展開しているなどと夢にも思わなかっただろう。オウム真理教の主使者・松本智津夫と弟子ら15人が、日本の中枢である霞ヶ関を狙った犯行だった。いつものように朝を迎えた人々、オウム真理教とは何の関わりもない人々が被害に遭い、12人が死亡し、5500人以上が受傷した。日本における大都市での初めての無差別テロ事件だった。

10年半もの長期にわたった刑事裁判で、松本智津夫は数々の事件についての詳細を語ることなく、2006年9月15日に最高裁で死刑が確定した。世間では「真実が語られないまま死刑で良いのか」という声が聞かれた。語らせるような最大限の努力がなされたとは思えないが、未だに平穏な生活ができない被害者や遺族の現状からすれば、これ以上裁判を続けることに何の意味も見いだせなかった。

私は、営団地下鉄(現在東京メトロ)職員で霞ヶ関駅助役だった夫を亡くした。その後、損害賠償訴訟の原告団が被害者の会を結成したとき、私は代表世話人になった。地下鉄サリン事件被害者の会の活動は、簡単ではあるが、後付に記したので参考にさせていただきたい。

私は、連日刑事裁判の傍聴に行き、民事提訴した損害賠償が実質的なものになるための活動をし、国内外を問わずメディア取材を受け、講演で各地を飛びまわった。事件が起きるまでの私は月並みな主婦だったから、どこにこんなエネルギーがあったのかと自分でも不思議だった。

いま思いつくまま考えるに、私はたくさんの方々から声をかけられ、それが無意識のうちにも勇気づけになっていたのではないかなと思う。「大変だったでしょう」「まだ裁判終わらないの?」「早く死刑にしてほしいわね」「身体に気をつけてください」等々。

最初の頃は、見ず知らずの人たちからの言葉が「不幸な人」「哀れな人」へのような気がして、ろくな返事ができなかった。そのうちに、私自身の受け取り方も変わっていき、心配してくださる方々に「ありがとうございます」と言えるようになった。

すると、相手の方は「あの時私は・・・」と話が続いた。「あの時私は、一つ前の時間の電車だったので、助かりました」「子供の卒業式だったので出かけたんですけど、地下鉄が動いてなくて」「うちの主人も被害に遭ったんじゃないかと心配して、会社に電話しましたよ」

地下鉄サリン事件が起きた時に何をしていたのか、多くの方々の記憶に残っていることを知った。私だけが「惨めな悲劇のヒロイン」だと思い込んでいたが、みんなが同じように恐怖を味わっていたから、「あの時私は」と話が始まったのではないかな。

今年13回忌を迎えるにあたり、安全で安心なはずの日本で起きた地下鉄サリン事件を、被害にあわなかった人たちと共有したい。被害者への勇気づけを大きく広げたい。

そして、松本智津夫死刑囚が裁判で事実を語らなかったからといって、それで終わりにしたくない。もう一度みんなで地下鉄サリン事件を考える機会になればと思う。再び悲惨な人々を生み出さないために・・・

地下鉄サリン事件被害者の会代表世話人 高橋シズエ

2007年3月20日 地下鉄サリン被害対策弁護団長 弁護士 宇都宮健児

以上で「はじめに」は終わりです。

■この件に関するお問い合わせは、地下鉄サリン事件被害者の会代表世話人、高橋シズエ sharp smile5@hotmail.co.jp までお願い致します。

2006年12月19日

体 験

2006-10-18 00:30:37 / Weblog キリストのイニシエーション part1

いよいよ私にとって、やっかいな領域に踏み込んで行かなくては、ならなかった。私が、なぜ、教団を辞めないのか、その原因に踏み込んでみたいと思う。なぜやっかいなのかというと、表層の意識と潜在の意識で、若干のズレがあるため、どうしても、教団批判や教祖批判と全く逆行した、話をしなくてはならなくなってしまうからである。

これを書くと、M 派の方の中には、う～んとうなる人がいるかもしれないし、A 派の方にとっては、ほ～らみろと勢いづかせる話になりかねないのだが、これもまた、私という人格の一部の話なので、避けて通るわけにはいかない。読む方はどう感じるかわからないが、正直に本音を書いてみようと思う。

お気づきの方もいるかと思うが、今まで、いろいろ書き込みをしてきて、教団批判や、成就者の批判はしてきたが、私は、一度も教祖をまともに批判したことが無い。それはなぜか？潜在意識の深いところで、教祖がシヴァ大神と同体であると感じているからである。

これは、もしかすると、例のマインドコントロールというやつの後遺症なのかもしれないが、自分ではナルコ以外では、強制的に何かされたという覚えはない。この自覚は、どこから生じたものであるかという、キリストのイニシエーションとルドラチャクリンのイニシエーションによって形成されたといっって良いだろう。

キリストのイニシエーションは、事件前に、出家者だけでなく、信徒にも極限の布施で行われた、前代未聞の LSD イニシエーションである。もちろん、当時は、LSD などということを知っていたのは、施している、教祖以下、高弟と関わったドクター達だけであっただろう。LSD がどんな薬かもしれない者がほとんどであっただろうである。私も、ちょっと変な味のするワインだと思った程度だった。ルドラチャクリンは、キリストよりも、薬の量が少し少なくて、意識がはっきりしたままでトリップするイニシエーションだった。

キリストのイニシエーションは、イニシエーション成就といっって、成就認定者が出たイニシエーションとしても、特異なイニシエーションであった。そこで、どんな体験が起きたのだろうか？

人によっては、強いお酒を飲まされたようになり、気分が悪くなって、吐いた人もいたし、意識が最後まで途切れない人もいたようである。しかし、たいがいは、意識がとんで強烈な体験をするのが、普通のものである。

以前に私の知り合いから、聞いた話では、現在では違法ドラックになってしまった、マジックマッシュルームだが、まだ販売が許可されていた時に、服用した人がいたらしい。その人が、服用後、音楽を聞いたら、スピーカーから音楽に合わせてピンクの象が次々現れて、びっくりして服用するのを止めたという話を聞いた。その時は、大笑いで、そんなことがあるんかいなと思ったが、キリストはそんなレベルではなかった。

キリスト・ルドラチャクリンに関する話は、少々長くなるので、日にちをまたいで、書き込もうと思う。

当時、私は、マハポの信徒であつたが、ある日、メッタジ正悟師から、「今度、新しい、すごいイニシエーションが出来ました、これは、今までのものとは、比べ物にならないくらい、強烈なイニシエーションですので、是非皆さん受けて下さい。」と言われた。極限のお布施で、受け付けますと言われたので、イニシエーション好きの私は、喜んで、マハポの給料全額布施して、みんなに拍手喝采され、いい気になって申し込みを済ませた。

しばらく日にちを置いて、イニシエーションが始まった。ネットで記録を調べたら、1994年6月から始まったらしい。私はまだ、亀戸に移動する前の、青山勤務の時であつた。最初、サマナから始まったのだが、我々マハポ信徒を指導していた、サマナの○島さんが、イニシエーションから戻ってきた時、首に包帯を巻いていた。

どうしたのかと思っていたら、体験談を聞いて、その理由が理解できた。以下に、ざっと彼の体験談のあらすじをまとめてみた。

イニシエーションで、尊師から飲み物を渡され、飲んだ後、個室に入っていると、いろいろな音が聞こえてきたのだそうだ。そのうち、自分のドアが叩かれ、怒声が聞こえ出した。おそらく、もうその頃には、完全に潜在意識に入っていたのだろう。周りの者たち全てが、殺人鬼になっていた。医者も看護婦も、次々に周りのサマナを殺し、自分のところに迫ってきた。自分には逃げ場がなく、もう絶体絶命、ここで、俺の救済は終了してしまうのかという無念さで一杯だったそうである。もうすぐ、ドアに手がかり、殺人鬼が部屋に入ってきて、自分は殺されると思った。

ここで、むざむざいたぶられて、殺されるくらいなら、自ら命を絶とうと、周りに凶器になる物はないかと探したが、なにも無かった。仕方が無いので、天井にある蛍光灯を、ジャンプしてもぎとって、半分に折って、そのガラスで自分の首を切ったのだそうだ。

その直後、狂気に満ちた殺人者達が、部屋になだれ込んできて、彼を押さえつけ、タンカのような物に載せて、部屋の外に連れ出した。これで、もうだめだ、殺される。自分達の救済活動がここで終わるのが、とても悔しかったという。「これでいいのか！これで俺達の救済が終っていいのかー！」と叫び続けていた。そうしたら、別なサマナが、「あなたもやっちゃいましたね。」と冷静な言葉をかけてくれたそうである。

はっと気づいて周りを見回したら、医者も看護婦もいつもの法友に戻っていて、自分は首から血を流し、全身を縄で縛られていたことに気づいた。そのサマナに「あ〜、やっちゃいました。」と答えたそうである。

これは、一例である。それぞれに、強烈な体験談が目白押しであった。まあ、薬でトリップさせたのだから、当たり前といえば当たり前だが、それが、強烈過ぎて精神にまで影響を与えたような気がする。

《 目次 》

1 P	地下鉄サリン被害者の会が手記を募集	
3 P	体験 - 白龍さんのキリストのイニ体験	1
5 P	初日の出 - 元サマナ	
6 P	ラーマクリシュナの女性的傾向	元サマナ
8 P	宮城刑務所だより	その3 元サマナ



某展望台から初日の出。 2007.1.1. 元サマナ撮影

ラーマクリシュナの女性的傾向について

ラーマクリシュナとは今から120年前のインドの宗教家で、自然にトランス体験(サマディ)してしまう体質の持ち主で、カーリー女神を崇拜し、神を見ることができたと言われている。

ラーマクリシュナの宗教世界はカーリー女神への信愛を中核に形成されている。その基本的性格はタントラ的であることが明らかにされつつある。ただしラーマクリシュナには、性交を不可欠の修行の一環とする左道タントラは生理的に受けつけられなかったようである。カーリー女神は性的存在ではなく、母神として信仰され、ラーマクリシュナは何の不安もなく母の慈愛に包まれ、三昧の歓びに入っていく(『聖者たちのインド』島岩、坂田貞二 春秋社 p208)

ラーマクリシュナは女性とのセックスに、あるいは性的存在としての女性に強い嫌悪感を抱いていた。ところが一方で、ラーマクリシュナは女装をすることがあり、女のしなをつくって信徒たちを笑わせることがあった。女のしなをつくって笑わせることは女性蔑視を下敷きにしている、女性への嫌悪の裏返しの表現とみなすこともできようが、女装することと女性への嫌悪感はどう結びつくのだろうか。パルト・チャタルジーは、女性のようにふるまえば女性に対する欲望は克服できると理解し(女になってしまえば女に対する欲望はありえないとヘテロセクシャル中心的に理解し)、そこにガンディーと共通するものを見出している。(同上p209)

当然ながら、妻をふくむ女性たちを退け、ヴィヴェーカーナンダをはじめとする聖なる少年たちに取り囲まれて満悦するラーマクリシュナのあり方に、ホモセクシャルな気配をかきつける人々もいる。(略)ノレンドロ少年(のちのヴィヴェーカーナンダ)が二回目にラーマクリシュナを訪れたときの情景を、玉城康四郎はつぎのように叙述している。「かれが師に挨拶して、その傍のベッドに腰をおろしたとき、師は、恍惚の気持ちで、かれをそば近く引き寄せ、その体の上に右足をのせた」。アメリカの宗教学者ジェフリー・クリパルはこの右足を、ラーマクリシュナの「いけない右足」と呼んでいる。右足がのせられた体とは、正確に言えば股間の逸物だったようである。ここからクリパルはホモのラーマクリシュナという大胆な仮説を提出している。(同上p209)

ラーマクリシュナの語録『ラーマクリシュナの福音』にはホモセクシャルな気配を感じさせる記述がある。

(若いほうのナレーンドラに)「さあ、おまえの身体を見るから、シャツを脱いでみなさい。非常に胸幅が大きい、成功するでしょう。ときどき来なさ

い」 (『ラマクリシュナの福音Ⅲ』シュリーマ著、奥田博之訳 東方出版 p195)

「しかし、良い少年である。わたしが言う、言う通りに、わたしのまえで裸になって立ったのである。何という少年であろう」 (同上 p201)

少年は、神人(ラマクリシュナ)の足に手を触れて床にひれ伏して挨拶し、敬愛を込めて神人の足をさすり始めた。(同上 p209)

ラームとは、子供の頃は大の仲良しでした。昼も夜も、一緒に過ごしていました。一緒に寝たものです。そのときは、十六、七歳でした。人びとは、「二人のどちらか一人が女だったら、二人は結婚したに違いない」と言ったものです。(同上 p295)

ラマクリシュナはベンガルの人だし、ある時期、ヴィシュヌ派のグルについて修行していた時期もあるので、ベンガルのヴィシュヌ派の説いている男性の女性化の影響を受けているように思う。現にベンガルのヴィシュヌ派が理想とした愛の形である乳搾り女性達のクリシュナへの愛について ラマクリシュナは次のように言っている。

乳搾り女性達の、何という愛の深さ！ (同上 p298)

またラマクリシュナは自分があたかも女性であるかのような意識でいたようである。

「神を対象として、精神を集中・思念するには、一つの特定の態度を執らなければなりません。私の場合は、子供の態度と、(女の)召使いの態度と、そして女友達の態度の三つの態度でした。神に対して、長いあいだ、(女の)召使いの態度と、そして女友達の態度を執っていました。そのとき女性のように度々サリーを着て、装飾品とスカーフを身に付けていたものです。子供の態度は、非常によいものです」 (同上 p184)

ただし、ラマクリシュナは異性とのセクシャルヨーガ(英雄の態度)は否定していた。

「英雄の態度は、良くありません。シャクティ(性力)派の剃髪した男と女、バイラヴァとバイラヴィー達のあいだで行われる英雄の態度のことです。すなわち、(ヴィシュヌ派と性力派の)或る派では、原物質・プラクリティを女性と見なし、(男性を純粹精神・プルシャと見なし)性交によって母なる神を慰めるのですが、その態度ではしばしば墮落します」 (同上 p184)

ラマクリシュナは「カーマ(性的欲望)」を「プレーマ(愛)」に変容する男性の女性化という教えを実践していたのかもしれない。

参考文献 『聖者たちのインド』島岩、坂田貞二 春秋社

『ラマクリシュナの福音Ⅲ』シュリーマ著、奥田博之訳 東方出版

元サマナ

2006.12.8

官刑だより。

①

今日はオウム神仏の会からオウム真理教へと変わった時のことを述べたい。ただし、20年も前の話なので記憶違いやあいまいなところもあることを初めに断っておきたい。

私が神仏の会に入会したのは昭和61年7月頃だ。当時はオウムのサークルのようなもので、麻原は先生と呼ばれていた。その頃は和気あいあいという雰囲気だ。何も堅苦しい所ではなかった。精神世界と一緒に冒険するメンバーがオウムであり、その船頭が麻原という感じだ。

同年8月に丹沢で集中セミナーがあり、3~4日間私も参った。この時は初めてなのに12時間連続の修行メニュー（瞑想は6時間だった）にさすがに音を上げた。この時初めて麻原のシャクティバットを受けた。目を閉じているのに目の前をカウフルなりボンガ舞っているのを見た時には本当にびっくりした。

このセミナーに麻原はパイロットババという超能力者を呼んでいた。ババはインド空軍のパイロットをいったり、インド政府からはマハーリシ（ヨガ王だっただろう）の称号を受けていると、麻原が言っていた。ババとはババジのことで解脱者のことを差していたと思う。麻原がババを呼んだのはババに水中サマディをさせる為だと私は聞いた。水中サマディは水の中で何時間も瞑想することだ。サマディ中は息を止める為、本物がインチキかは水中サマディをすれば一発でわかる。

ところがババは水中サマディはしないし、女やカネを要求するばかりで、すぐにインドに帰ってしまった。私が渋谷にあった道場に行って

終

②

みると、そのことを麻原はホヤいていた。後に行われた集中セミナーで「解脱と悟りの両方が必要」と講話をするが(インシエーションに収録)、その時に出てくる「超能力者」とはパイロットババのことで彼のことをウソ付きと断っている。

麻原はパイロットババのことを自分のグルだと言っていたが、この件の後はそのことを口にしたくなかった。麻原の口から妻子すらもグルに差し出さなければならぬ等と聞いたが(あるいは自分は差し出したと言ったかも知れない)、そのコメンツは自分は差し出したという感じだった。インドからの往復の旅費や、1ヶ月近く滞在(もう少し短かったかも知れない)した費用などは多額であったろうが、自分の期待したものが得られずにババに逃げられたのだから、踏んだり蹴ったりだったに違いない。

たぶん、パイロットババが水中サマタリを成功すれば、麻原はババを祭り上げ、自分はその一番の弟子として承認されることを狙っていたのだと思う。ババが麻原は解脱者だと言えは、その権威によって多くの人が麻原を認めるに違いないと皮算用していたのだろう。

この年の11月と年末年始に集中セミナーがあり、この頃「青年部」が発足した。はっきりしないが11月のセミナーの後だったと思う。神仙の会には修行ばかりを行う「サガ」という集団があった。彼らは半年間は全く働かなくてもいいように120万円貯め、それを麻原に差し出す。その変わり、麻原は半年間彼らの生活を保障し、修行に専念させるというシステムだ。彼らは言わば内弟子である。一方、青年部は会員の集

終

③

まりで、神仙の会をもっと多くの人に知ってもらう為に麻原の呼び掛け^で集まった集団である。これは後に「ボディ・サットヴァの会」と名称が変わった。

青年部は発足当時10人くらいいた。上祐や杉浦実、岐部ら後に幹部になる者の他にも何人かいたが、宗教化していくうちに嫌気が差して少しずつ消えていった。当初、私はそのメンバーではなかったが、週に何度もバクティで道場に顔を出していたので、成り行きでいつの間にかメンバーになってしまっていた。

昭和62年2月頃だったと思うが、麻原はインドに^{行き}ダライマと会ったようだ(今度はチベット密教の権威を使うつもりらしい)。帰国した麻原はサニガと青年部を一緒にまとめたいと言い出した。青年部が活発な動きをしている^所と云われたのを記憶している(そんなことはないと思っているが)。

麻原が留守の時、次のようなことがあった。当時、~~ニ~~^Rマンと呼ばれ麻原が解脱者ノ号に育とうとしていた男と同僚の女性が男女の仲になった。彼女には一緒に出家した「彼氏」(同棲していたらしい)がいたので三角関係となった。彼らは麻原帰国前にオウムを齎れ出ている。また、もう1組カップルが出来、これも男女の仲になった。このようなことがあり、サニガが動揺していたので、麻原はこれに青年部^{のメンバー}を加えて再出発しようとしていたのかもしれない。サニガは自分の修行には関心があるが、青年部は麻原の布教を手伝いたいということに関心があるので麻原の言いつけになりにやると考えたのかもしれない。

このようなこともあり、麻原は出家をするか否かの決断を迫られた。



最終的には、青年部で活動していたメンバーはみんな出家することになり、それぞれが課題を克服することになった。メンバーの中で一番手間取ったのが私で、家族の情や、会社の仕事関係（会社ではシステムの中核を作っていたので、簡単には抜けれなかった）でなかなか前に進めなかった。

サカと青年部が合流し、私達も順次出家していき、少しずつオウム^{S62.7/20th}の活動が活発化していった（赤堤の東京本部に拠点を移したのもこの頃）。

この時期、オウム神仏の会からオウム真理教へと名称を変更することが麻原から打ち出された。正確にゴールデンウィーク中の奥秩父での集中セミナーの時のことだ。私がセミナー会場に足を運ぶと、このことが話題になっていた。まだ出家をしていなかった青年部はこぞって反対した。「宗教くさいのは嫌だ」と。もっと宗教を隠せるものでなければ一般受けしないと意見もあった。しかし麻原は、救済活動をする為なのだから「真理教にする」と自説を曲げなかった。私達も救済活動をするのが目的で出家しようとしていたので、最終的には納得した。

ここで、私達が出家しようと思う動機となった救済活動に触れておく。当時は3つの救済と呼ばれ、①病気で苦しんでいる人を助け、②人生の諸問題で悩んでいる人を励まし（同時に自カ救済へのヒントと方法を与える）、③霊的な進化を求める人に道を示すというものだった。

そもそも、救済とは何だろうか。私は相手が望むものを提供することだと思う。例えばアフリカでは飢餓で餓死し、食べることもできない人達がたくさんいる。彼らは食事をしたい、安全に暮らしたいと欲求している。

彼らに現金やダイヤモンド等の貴金属を上げても決して喜ばないだろう。結果的には現金やダイヤは食料に交換できるが、今腹がへっている人には食べられないものよりも食べられるものの方が何十倍もありがたい。私達にとっては貴金属や現金は食料よりも大変な価値だが、もしも太平洋の真ん中で漂流すれば、100カラットのダイヤよりも1匹の魚の方を選択するに違いない。

このように、私達は救済活動をするベースに「相手が望んでいサービスを提供する」を持たなければならなかった。しかし、「自分達に都合のいいものを押し付け」してしまったと今では思う。これではオウム神仙の会からオウム真理教に名称を変更した意味も全くなかった。

ヴァジラヤースの教えやホマという考えは、^{100カラットの}飢えた人達にダイヤモンドを提供するものだった。もし、自分が飢えているのに、^{100カラットの}ダイヤを持って来られて本当にうれしいと云えるだろうかとア・レフに残っている人に言いたい。

また、「救済活動」をしているつもりになっていないかと絶えず自問してもらいたいと思う。私はいつもづもりになっていた。本当に相手の望むことを行わないならば、原点に帰って、あるいは立ち止まって、自分は何をしているのかと自問してもらいたい。そして、「救済する側」にいるという思い上がりだけは厳に慎んでももらいたい。このようなことを認識していなければ私達と同じ破滅の運命を持っていると声を大にして言いたい。

発行 カナリヤの会

〒242-0021

神奈川県大和市中央 2-1-15 パークロード大和ビル5階

大和法律事務所 窓口滝本太郎気付

電話 046-263-0130 ファックス 046-263-0375 takitaro@yha.att.ne.jp

横浜銀行大和支店 普通 1343078 カナリヤの会滝本太郎